ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

「だぁー……つっかれたー！」

　レイが、そう叫んでテーブルに突っ伏す。

　倒した『ＭＯＣ』の兵士達をマルクスさんに引き渡した俺達は、部屋に戻ってきた。俺はカラコンを外し、ケースにしまう。結局、今日俺が戦った時間は、一分十八秒三六。制限時間ちょっとギリギリだが、敵の数が少し多かったので、この程度の時間で済んだのは、むしろ良くやった方だろう。ほっと一息ついて、俺は自分の部屋に行こうとする。

「あれ、ロラン？　どこへ行くんですか？」

「部屋」

　不意に出た問いに、俺はそう答えて再び自分の部屋に向かおうとする。

「怪我とかは……」

「向こうにいる間に確認したけど、無かったから大丈夫。心配してくれありがとう」

　続く問いにも即答し、俺は今度こそ部屋に入った。

　カラコンを机の引き出しにしまい、壁に二本の愛刀を掛ける。そしてマントを外し、服とを脱ぐ。こいつは後で洗濯機の中に入れるため、床に丸めて投げておいた。下着を替えて、黒と白のチェック柄のパジャマに着替えた俺は、そのままベッドに仰向けにダイブした。重い刀を振り回したので、もうクタクタである。毎回そうだが、戦闘のあった次の日は、そこそこ酷い筋肉痛が襲って来るのだ。

「まぁ、マルクスさんからウェイトリングも貰ったし、筋肉痛も、少しはマシになるか……」

　そんなことを呟いた俺は、そのまま目を閉じる。研修所で生活していた部屋と比べると少し狭いはずのこの部屋が、どこか広く感じる。それが心地よくて、俺はそのまましばらくの間、目を閉じていた。

「ロラン、お風呂空いたよ」

　どれくらい、そうしていただろうか。樹葉の声が扉越しに聞こえ、俺は風呂場へと向かう。今度は、詠はいなかった。服を洗濯機に放り込み、俺はパジャマを脱いで風呂場に入る。

　シャワーを浴びた後、花が三輪入った、バスタブいっぱいに溜まったお湯の中に、俺はゆっくり肩まで浸かる。

「ふぅ……」

　じわりじわりと体の芯まで温度が伝わっていく中、思わずそんな声が出た。風呂場にほんのりと香るローズも相まって、一人で入る風呂は、中々に癒される。

「……いや」

　再び、思わずそんな声が俺の口から漏れ出た。それを否定するように、俺は頭を振る。もっとちゃんと温まろうと、俺は顔の半分位まで、お湯に浸かった。

そこに、バスタブに浮かべられた白いガーベラに目が止まる。俺が持ち込んだ花ではない。多分、レイ達の誰かが持ち込んだものだろう。このガーベラは、毎日毎日、なぜかバスタブの中に入っているのだ。風呂掃除する人の身にもなって欲しいものである。何か意味があるのだろうが、女心は分からない。

俺は、体と頭を洗うために、湯船から出た。

　俺達の部屋のルールでは、風呂は一番最後に上がった奴が洗うことになっている。今日は俺が最後なので、スポンジを使ってバスタブを洗った後、さっきまで着ていたパジャマに着替える。花は、ゴミ箱に捨ててしまった。

　時刻は、まだ八時半。ついこの間まで小学生だった俺が言うのも難だが、中学生が寝るには、まだかなり早い時間だ。適度に疲れて、時折欠伸の出る俺も、まだ寝る気にはならない。折角中学生になったのだから、ちょっとくらい夜更かししていたい。

　そんな訳で、特にやることもないが、俺は自分の部屋で、今日貰った国語の教科書を開いていた。流石に中学生の教科書だけあって、この間まで使っていた教科書に載っている小説と比べると、面白さが全然違う。夢中で読んでいる内に、気が付けば、十時になっていた。

「ロラン、ちょっといい？」

　そろそろ寝ようかと教科書を閉じると、コンコンという音の後、レイのそんな声がした。

「……どうした？」

　すると、髪をほどいたレイが顔を覗かせる。何故か、ちょっと口角が上がっていた。

「話したいことがあるから、ちょいリビングに来て」

「分かった。今行く」

　なんだろう、と思いながら俺はそう言って、部屋を出た。リビングには、既に全員揃って椅子に座っている。

「悪い、待たせた」

　俺も、残り空いている席に座った。俺が席につくやいなや、レイが口を開く。

「皆、明日は暇？」

　そう聞かれ、俺はちらりとカレンダーを見る。明日は学校があるかと思ったが、今日は金曜日だ。どうも、入学式までの長期休暇のせいで、曜日の感覚が少しずれていたらしい。

　一瞬頷きかけた俺だが、そういえば、日ノ下用の本を調べに行かないといけないことを思い出した。

「悪い。俺は明日は本屋に行こうと思っているんだ」

「ほ……本屋？　珍しいね」

　レイがキョトンとした顔で呟く。まぁ、確かに俺が本屋に行くなんて、滅多にないことだからな。だが、これも任務のためである。

「この近くの本屋は、日曜日は休みだから……明後日なら暇だけど、それじゃ駄目か？」

「うーん……できれば、土曜日がいいんだよね」

　すると、レイが四枚の細い紙切れを出す。

「あっ、これって……」

　詠がそれを見て、目を輝かせた。声には出さないものの、樹葉も身を乗り出して、それを覗き込んでいる。

「そ。この間、商店街の福引で当たったんだ。『シャインピア』のチケット」

「『シャインピア』って、あの遊園地の？」

　黙っていた樹葉も、ついに黄色い声を出す。正直な所、俺も同じ気持ちだ。普通の遊園地なら、俺も「遊園地なんて、小学生までだろ」と鼻で笑っていたところだが、そことなれば話は別だ。『シャインピア』というのは、確かこの間ニュースで取り上げられていた遊園地である。アトラクションの待ち時間は、某夢の国と引けを取らないとか。俺もかなり、興味をそそられたが、入園チケットは子供は一人四千円と、とても中学生がおいそれと出せる金額ではない。

　多分この期を逃すと、もうしばらくは行くことはないだろう。

「本当は、特賞の温泉旅行が欲しかったんだけどねぇ。ま、二等で我慢ってところかな？」

　ケラケラ笑いながらレイはそう言うが、二等でグッジョブだと、俺は思う。温泉旅行なんて、どうせ詠の裸を間近で見る羽目になるだけで、俺に得はない。

「いえ、そんな、我慢だなんてバチが当たります！　ぜひ、皆で行きましょう！」

　詠のその発言に、俺も拳を上に突き上げて賛成の意を示したい気持ちでいっぱいだった。現に、右手は胸のあたりまで上がっている。だが、そこで止まっていた。

　本屋なら、明日を逃しても来週がある。『シャインピア』は、今回が最初で最後だろう。常識的に考えれば、普通は『シャインピア』をとる。

　だが、俺が明日本屋に行くのは、あくまでも任務の一貫として、日ノ下海斗に近づき、敵か否か判断するためだ。敵じゃなければ問題ないが、敵なら放っておくわけにはいかない。近づくのが一週間遅れるくらいなら……いや、万が一のことを考えると、それは出来ないか？

「……すまん」

　遊園地と任務を秤にかけた結果、俺は上げかけた手を下ろしていた。そして、溜息を一つ。

「俺が明日本屋に行くのは、任務のためだ。悪いが、俺抜きで楽しんできてくれ」

　いつか、もう一度チャンスが巡ってきますようにと祈りながらそう言った後、俺は再び溜息を吐いた。

　そんな俺を見て、三人はそれぞれ顔を見合わせる。すると、

「……じゃあ、私もパス」

　樹葉がそう言った。

「いや、行ってこいよ。折角当たったんだしさ」

「……僕も、ロランが行かないならパスにします」

　慌てて両手を胸の前で振って言った俺の耳に、今度はそんな詠の声が届く。

「ちょっ……」

「そんじゃ、決まりね。今回はパスで」

　最後にレイがそう言った。俺は首を横に振る。

「待て待て待て。行けない俺が言うのもアレだが、多分、今回を逃すと、しばらくは行けないぞっ？」

「あー、それなら心配しないで。チケットの有効期限、五月末までだから。今度、皆が暇な時に行きましょ」

　レイがバチンとウインクして、俺の目の前でチケットをヒラヒラとさせる。

「入学式のすぐ後なら、皆も精神的に余裕があるかなって思ったから誘っただけよ。心配しなくても『シャインピア』は、もうしばらくは逃げないわ」

　そういうことなら、俺がさっきまで悩んでいたのは、なんだったのだろうか。

「そ……それを先に言えよ！」

　気が付けば、俺はそう叫んでいた。